

第184回定期演奏会

2021年7月16日(金) 17:45開場 18:45開演

三井住友海上しらかわホール

指揮/角田鋼亮(当団常任指揮者)

- ・J.S.バッハ: 無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ第2番 BWV 1004より「シャコンヌ」(編曲: ラフ)
- ・オネゲル: 交響曲第4番「バーゼルの喜び」H.191
- ・シューマン: 交響曲第3番変ホ長調Op.97「ライン」



©Hikaru Hoshi

世界的名サクソフォン奏者もお迎えしている本日に続きまして、次回7月16日の定期演奏会は、我らが常任指揮者・角田鋼亮さんと共に〈音楽の川〉の流れを体感できる、これまた素敵なプログラムです。

ちょっと他では聴けない(しかし面白いことうけあいの)珍品から天下の名曲まで、喜びと明るさ、荘厳な輝きなど感動の幅もひろい次回の3曲について、ちょっとご案内しておきましょう。

◆バッハをめぐる、時を越える旅(ふたたび)——ラフ編曲版《シャコンヌ》

やはりマエストロ角田と共にのおくりした前回(5月14日・第182回)の定期演奏会では、ヴェーベルンやヴィラ=ロボス、プーラムスと〈バッハを巡って、時を越える旅〉をお楽しみいただきました。実は次回の7月定期も、〈偉大なるバッハ〉の存在が隠れたテーマのように響いています。

というより、冒頭はまさにそのバッハ作品なのですが、ヨハン・ゼバスティアン・バッハ(1685~1750)ご本人が聴いたら目を丸くするに違いない、という珍品——ラフ編曲によるオーケストラ版《シャコンヌ》です。

原曲は、バッハの〈無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ第2番 二短調〉の第5曲。ヴァイオリンがひとりきりで弾いているのに、その技巧を尽くして幾つもの声部を共に歌わせたりと、豊かな小宇宙を広げてみせた大変な傑作です。ヴァイオリンはもちろん、他の楽器の演奏家たちにも愛されてきました(本日も登場の須川展也さんも、アルバム『バッハ・シークエンス』でサクソフォン独奏版を録音、魂に触れる名演を聴かせてくださっています)。

編曲も山ほど生まれるなか、当然ながら「オーケストラで鳴らしてみたい!」と考えたひとと数々。次回お聴きいただくのは、その先駆ともいえるヨアヒム・ラフ(1822~82)によるオーケストラ版です。

スイス生まれのラフは、長らくドイツで活躍して11曲の交響曲をはじめ多くの作品で人気を博した作曲家でした。彼の時代、偉大な先人・バッハへの敬愛があらためて高まっていたが、とりわけこの〈シャコンヌ〉を愛したラフは、この曲にみられる対位法(幾つものメロディを同時によく調和させて重ね合わせる技法です)の素晴らしさをみるに、無伴奏ヴァイオリンに先立つ別のかたちがあったのでは?と考えたらしく、その〈あるはずだった〉かたちを、オーケストラで流麗に表現してみよう……とこの編曲版をつくりました。

木管楽器のアンサンブルで荘重に始まるラフ編曲版、弦や金管も大活躍の壮麗なサウンドは、ロマン派の作曲家が幻視した(現代に蘇る、理想のバッハ)を見事にあらわしています。優れた編曲ながら最近演奏される機会も稀なので、ぜひお聴き逃しなく。

◆バッハを愛し、スイスの光る風を愛し……——オネゲル《バーゼルの喜び》

ラフが生まれたのはスイスはチューリッヒ湖畔の小さな街。湖の北端がチューリッヒの街ですが、若き日にここで音楽を学んだのが、スイス人作曲家アルチュール・オネゲル(1892~1955)です。

生涯の大半をフランスで過ごし、フランス音楽とドイツ音楽の双方から影響を受けつつ独自の語法を開拓していったオネゲルは、劇的大作に力を発揮したほか、対位法的なテクニクでもずば抜けた才能を発揮したひとでした。……このオネゲルの長けた対位法もまた、彼が愛してやまなかったバッハからの強い影響なのです。

話が飛びますが……、ラフやオネゲルゆかりのチューリッヒ湖から流れ出す川をたどってゆくと、やがてライン川へ合流し、スイスの北の国境にあるバーゼルの街へ流れこみます。この街では、パウル・ザッハーという20世紀音楽に大きな影響を残した音楽家が、バーゼル室内管弦楽団(現在ある同名楽団とは別)を率いて活躍していました。この楽団の創立20周年を記念して委嘱されたのが、次回定期でお聴きいただく傑作・交響曲第4番「バーゼルの喜び」(1946年)です。

オネゲルにとって、長く離れている故国スイスからの委嘱でもありましたし、第2次世界大戦が終わってようやく暗雲が去り、ヨーロッパに久しぶりの晴れ間が見えた頃……ということもあって、作品には明るい幸福感が満ちています。

メロディとリズムの美しい戯れに、光の風が吹き抜けるような第1楽章から、バッハの時代には盛んだった古い変奏形式・パッサカリアで書かれた第2楽章では、謎めいた雰囲気の中に鳥の鳴き声のようなメロディが呼び交わしたり……、終楽章も爽やかな空気感のなか、さまざまなテーマが贅沢に登場するのですが、それが後半で見事に(対位的に)重ねられて洒落た楽しい音楽をつくる(バーゼルの謝肉祭の歌も加わったり)、才気も輝く素敵な時間です。

バッハへの敬愛も隠されたこの名曲、オーケストラのソリストたちの妙技も愉しめる逸品です。セントラル愛知響ならではの、親密な表現をお楽しみください。

◆ライン川のほとりで、心機一転の壮大な傑作——シューマン《ライン》

スイス国境の街バーゼルから、ふたたびライン川を北へくぐってゆくと……若き日のモーツァルトが長く滞在して刺激を受けたマンハイム、ベートーヴェンの生まれたボン、大聖堂で知られる古都ケルン……といった街を流れゆき、やがて詩人ハイネの生地・デュッセルドルフにたどり着きます。

この街で創作活動の最後を過ごしたのが、ロベルト・シューマン(1810~56)です。

シューマンもまた、偉大なる先人・バッハに深い敬愛を抱いたひとでした。

彼の時代、それまで埋もれかけていたバッハの再発見が進んでいました。なかでもシューマンは熱心なひとりで、バッハを〈すべての作曲家が知識を汲むべき源泉〉と讃え、熱心にその作品を研究し、バッハ作品集の刊行に尽力し、はたまたバッハの無伴奏ヴァイオリン作品にピアノ伴奏を追加(!)した編曲版をつくるなど、特別な愛をかたむけ、その先進性に深い共感を抱いていました。

——ところで。シューマンは若い頃から、バッハゆかりの楽都ライプツィヒ、そして宮廷都市ドレスデン……と、ドイツ東部のザクセン王国で過ごしてきました。そこで作曲や評論など、充実した活動を繰り広げてはいましたが、長らく望んできた〈オーケストラの音楽監督〉といった輝かしい地位には恵まれませんでした。

鬱屈気味だったところへ、ドイツ西部の活気あふれる商都・デュッセルドルフから、市の音楽監督への就任を求められたシューマンは、人生と創作の転機を求めて、ライン河畔のこの街へと居を移したのです。

転居してまもなく、シューマンは短期間で新作・交響曲第3番 変ホ長調《ライン》を書き上げます。明るいライン河畔の街で心機一転、その朗らかな心境も反映してしましようか。シューマンの頂点ともいえる傑作となりました(藤本一子「作曲家◎人と作品シリーズ シューマン」[音楽之友社/2008年]が読みやすく詳しい案内書です)。

朗らかな祝祭感と、あふれる喜び。大きな波のようなメロディがホールに満ちる冒頭から、その豊かさに魅せられてしまう名曲ですが、川の名前を冠したのはあくまで愛称で、各楽章がなにか特定の情景をあらわしているわけではありません(ライン川といえど大波は立ちませんし……)。

巧みな作曲技法も織り込みつつ、伸びやかに愉しい雰囲気の中にも、荘厳な儀式を思わせるような緩徐楽章、はたまた響きの大家藍をつくるフィナーレ……と、全5楽章が、ロマン派の連作短編小説をみるようだ、と指摘したひと(エドラー/山崎太郎訳『シューマンとその時代』[西村書店/2020年]に、社会状況や思想・芸術の流れとシューマンの活動の関連などと共に詳しく論じられています)。たとえば〈物語のない、音の連作小説〉と思って聴いていただくと、そこにシューマンが託した深い詩情や理想(そして、ここにも隠されているバッハへの畏敬!)も、さらに豊かな表情をみせてくれるかも知れません。

愉しくも知的なプログラミングで快走する、マエストロ角田&セントラル愛知響の名コンビと共に、〈バッハへの敬愛〉と〈ライン川〉をめぐる音楽の旅……。バッハ[Bach]がドイツ語で〈小川〉という意味なのは、なかなか出来すぎたお話ではありますが……。では、次回もこのホールでお会いいたしましょう。

やまの たけひろ

山野雄大

ライター[音楽・舞踊評論]。『音楽の友』『レコード芸術』『バンドジャーナル』各誌をはじめ雑誌・新聞への寄稿、テレビ・ラジオ番組での解説、CDライナーノート・企画構成、オーケストラやバレエ公演の演目解説、取材撮影など多数。第一生命ホールでのコンサートシリーズ《雄大と行く 昼の音楽さんぽ》司会・構成。

Profile

